

介護小説

# もうひとつの世界

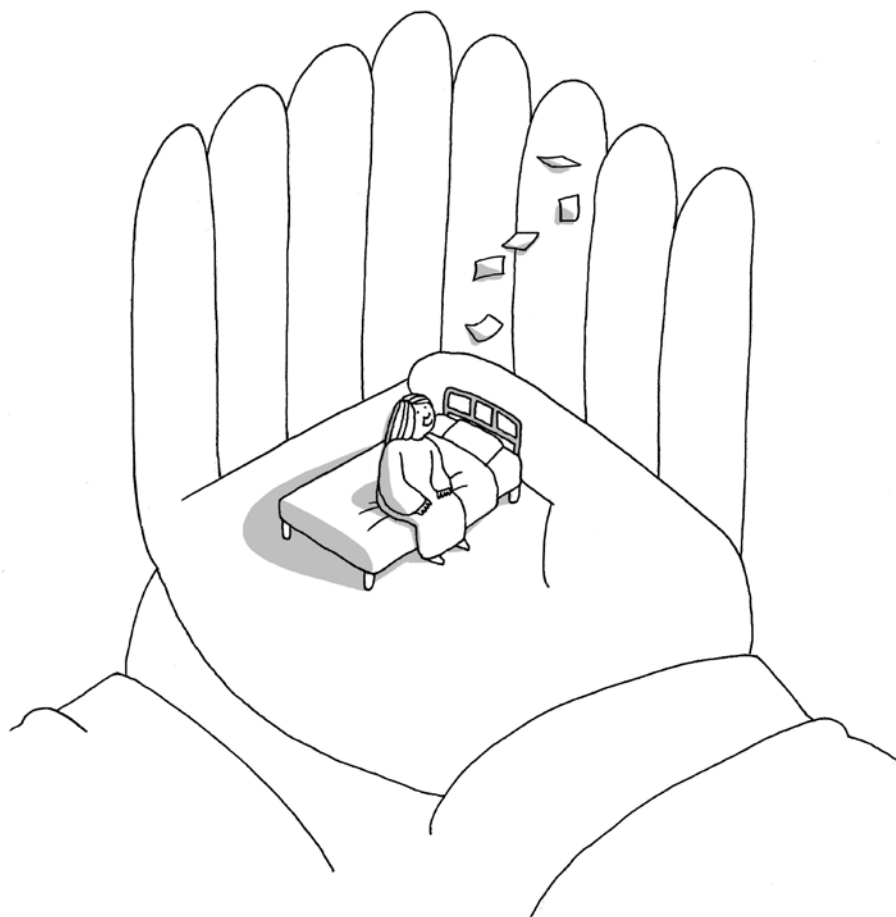
阿部敦子

画／市村 譲



第14話

伝言



この物語は、著者の介護体験をもとに、介護現場でのひとつの場面を「介護される側（その人の世界）」と「介護する側（ケアスタッフの世界）」の双方から描いたフィクションです

あべ・あつこ●作家。介護福祉士、認知症ケア専門士、介護支援専門員、相模原市認知症介護指導者。介護現場に携わった経験をベースに、2015年「認知症オンライン」で本作品の原形となる『その人の世界』連載を開始。作家活動を続けながら、介護の仕事も継続中。著書に、認知症介護小説『ひだまり』（電子書籍／ソクラ・テクノス社）『要恋慕度5』（電子書籍／幻冬舎ルネッサンス新社）など



(C) 2020 日本医療企画.

# その人の世界



あなたは今かぜをひいていて、熱が下がったばかりです。お部屋から出ると、他の人にかぜをうつしてしまうので、出てもいいと言われるまではお部屋で静かにすごしてください。

私、熱なんて出していたかしら。

部屋から出ようとして、ドアに貼ってあるこの紙が目に入る。声を出して読んでみるけれど、これは本当に私のことかしらと首をひねる。

「べつに、なんともないんだけど……」

ベッドに腰を下ろし、リモコンでテレビをつける。

「何か甘いものが食べたいな」

壁際の小さな丸テーブルには籐編みの小物入れが置いてあり、サイコロみたいなチョコレートがいくつか入っている。ひとつ取って口へ放り込み、舌で転がした。

「喉もかわいたな」

冷蔵庫がないから我慢するしかない。お茶を飲む時はいつも広い部屋でみんなと一緒にだけれど、どうやら部屋から出てはいけないみたいだから誰かが持ってきてくれると信じるしかない。

「あーあ」

この部屋にいて、何もすることがない。テレビを観るか、ゴロゴロ寝ているくらい。そういえば、

仏壇のお水とごはんは誰か取り替えてくれたかしら。主人の仏壇はいつも私が手入れをしていたけれど、ほったらかしになっていたら困る。

ドアまで歩いてノブに手をかけたところで、また貼り紙。

「あなたは今かぜをひいていて、熱が下がったばかりです。お部屋から出ると、他の人にかぜをうつしてしまうので、出てもいいと言われるまではお部屋で静かにすごしてください」

声を出して読む。うーん。書いてあることはわかるけれど、私は熱を出したおぼえもないし、それ以外のことも何もないんだから、少しくらい大丈夫でしょう。

そろそろと、少しずつ、ドアを開けて廊下をうかがう。誰もいない。廊下に出て歩き出すと、視界の先にエレベーターが見えた。

「あれ？」

ここは家ではなかったか。あの貼り紙をしたのは家族だと思っていた。こっそり仏壇だけ確認したら部屋に戻ろうと思っていたけれど。

「あっ！」

突拍子もない声が横から聞こえた。白いマスクをしたお姉さんが私を見て駆け寄ってくる。

「お部屋から出たらダメって言ってるでしょう！」

貼り紙を見なかつたんですか！」

「だって私、すごく元気なのよ」

「そういうことじゃないんですよ！ 元気でも、まだ他の人にうつしてしまう可能性があるんです。だからお部屋にいてください」

「はい……」

お姉さんの剣幕に圧倒されて、すぐごと部屋に戻る。本当に私が戻るかどうかを疑ったのか、お姉さんは部屋までついてきた。

「私、喉がかわいてしまって」

「ああ、それじゃあ後でお茶をお持ちしますね」

「お願いします……」

お姉さんが廊下側からドアを閉める。貼り紙はまだそこにあった。

「あーあ」

ベッドにごろりと仰向けになる。つまらない。一日が長い。私、どこも悪くないのに。これが家なら、やるべきことがいっぱいある。やらなければならぬこと、やりたいことが自由にできる。

「どうしてここにいるんだろう」

天井に咳いて、はたと考える。どこも悪くないのに家にいられないって、どういうこと？ ここはきっと、具合の悪い人がいるところよね。熱だとか風邪だとか言っているけれど、本人が違くと主張しているのに話も聞いてもらえないなんて、おかしいわよ。

「失礼します」

コンコンコン、とノックの音がしてから、マスクをつけたお姉さんが入って来た。

「お茶ですよ」

「ああ、ありがとうございます」

起き上がって両手で髪を整える。

「ねえ、お姉さん」

「はい」

「私はどうして、ここにいますか」



「それは……」

「口ごもったのは窮屈なマスクのせいではないとわかる。お姉さんは私の目から視線を外した。」

「私、熱なんか出してないし、どこも悪くないんです」

「そうですね。今はそうかもしれません。ただ、これは目に見えない問題なので、念のため人と離れて過ごす必要があるんです」

「私にその問題があるって、いったい誰が決めているの。そんなのただの差別じゃない」

「差別？」

「そうよ。こんな一方的に閉じ込められて、一歩も外へ出られないなんて」

「でもこれは、ご家族も望まれていることです」

「はあ？ 家族が？ 私の家族が？ そんなはずないわよ。どうしてそんなことが言えるの」

「それは……」

「続く言葉を探す時間かせぎをするように、お姉さんは自分のマスクの紐をかけ直した。説明できない理由がある。それは、私が家族に見放されたということなのか。」

「もういいわ。こんなに元気でも、熱なんか出してなくても、病原菌扱いされることがあるのね。もういいわ。お茶ありがとう。早く出て行きなさい。うつされるの嫌でしょう」

「お姉さんの顔も見ずにまたベッドに横になると、私は頭まで布団をかぶった。お姉さんが何か言っていたけれど、よく聞こえなかった。たとえそれが私を慰めるための言葉だったとしても、私の心には届

かなかったに違いない。何を言われても、私は孤独だった。やることがないからでもなければ、閉じ込められているからでもなかった。今の私は、どこにいてもひとりぼっちだった。」

「浅い眠りから覚めて私は布団から出た。」

「喉がかわいたな……」

「壁際の丸テーブルに緑茶の入ったカップが置いてある。色が黄色く変わっていたけれど、喉を潤すのには充分だった。」

「おいしい」

「一気に飲み干してから、これは自分のカップではないと思いついた。」

「誰かに返さないといけないのかしら」

「カップを手に、ドアまで歩く。」

「ん？」

「ノブに手をかけたところで貼り紙に気付く。誰かが貼ったメッセージ。ぜんぶで5枚貼ってあった。」

お母さんへ

自分ではわからないと思うけど、お母さんのからだは調子が悪いんだよ。じっとしているのが大変だ。すくすくわかるから私もつらいよ。早くすっきり良くなるといいな

直子

「嫁、直子からのメッセージを声に出して読んだ。他の4枚も読み上げてみる。」

「おばあちゃんへ。具合が悪いって、自分でわかってても苦しいし、わからなくてもそれはそれでつらい

よな。働き者のおばあちゃんだけど、今は医者のお話を聞いて大人しくしてないといけない。早く良くなれよ。純平」

純平。孫からだった。」

「お母さん。退屈だろうけど、がんばれ。充」

充。短い言葉がいかにも息子らしい。」

「おばあちゃん。外に出られない時はボクもつらいワン。でもおばあちゃんががんばっているから、ボクもがんばっておうちで静かにしているワン。チロより」

「何これ。家で可愛がっているポメラニアンじゃないの。思わず笑みがこぼれる。会えばシッポを振って飛びついてくるだろう。」

「チロの姿を想像して少し笑ってから、右上の角に貼ってある最後の1枚に視線を移す。」

「波子へ。目に見えないからだの不調が早く良くなって、君がまた元気に笑えるように祈っているよ。愛しているよ。宗太」

夫だった。こんなことを言うなんて珍しい。」

「長いため息をついてから、私は窓際まで歩いた。ちょうど夕陽がオレンジから紫に変わり、一日の終わりを告げるころだった。」

「愛しているよ……」

「愛なんて、言葉にしたとたん愛ではなくなるって言うていたのは誰よ。まったく、年をとると人も変わるものね。」

「ひねくれてみたものの、もう一度ドアまで歩いて夫の言葉を指でなぞる。私は、ひとりぼっちではない。どこにいても、みんなと一緒にいる。」

# ケアスタッフの世界



「あっ！」

波子さんの姿が見える。もう、あれほど部屋から出ないように言っているのに、何回言ったらわかるんだろう。走り寄ると、波子さんがこちらに身体を向けた。思わず声が大きくなる。

「お部屋から出たらダメって言ってるでしょう！」

「貼り紙を見なかつたんですか！」

「だって私、すごく元気なのよ！」

「そういうことじゃないですよ！ 元気でも、まだ他の人に入つてしまう可能性があるんです。だからお部屋にいてください！」

「はい……」

肩を落とした波子さんが部屋に戻ろうとする。付き添って中に入るところまで見届けると、振り返って波子さんが言った。

「私、喉がかわいてしまつて」

「ああ、それじゃあ後でお茶をお持ちしますね」

「お願いします……」

頷いて部屋を出る。熱が下がってからというもの、何度言つても出てくるようになった。特に午後。退屈して貼り紙の効力がなくなってくる頃だ。外から鍵をかければ虐待だし、かけたところで波子さんにとって内側から鍵を開けることなどたやすい。

熱が下がったばかりの時は、少しずつ食欲が出て

きて甘いものを欲しがった。そこで部屋にチョコレート置いてみたけれど、そればかり食べてもいられなかつたらしい。

「孫に巾着を縫つてやらないといけないのよ」

すでに高校生になってお孫さんのことを、まだ小学生だと思つているようだった。ハギレと裁縫セットを手渡すと、しばらく部屋から出てこなくなった。ほつとしたのも束の間、針をなくしたという。ベッドの上を探しながら、枕に刺さっているのを見つけた時にはぞつとした。裁縫セットはすぐに回収され、再び波子さんは廊下に出るようになった。

「仏壇の水とごはんを取り替えないと」

ここを家だと思つている時に言い始めるのがこのセリフだった。自宅では仏壇の手入れが日課だったというから、やらないと落ち着かないのはわかる。ただ、仏壇があまりに大きいことと、まだ入居して5日しか経っていないことから、仏壇に代わるものを準備する時間も余裕もなかった。この頃の波子さんはもう、熱を出したことはすでに忘れていた。

「さて」

3回ノックをして波子さんの部屋に入る。

「失礼します」

カップを持って入ると、波子さんはベッドに仰向けになっていた。

「お茶ですよ」

「ああ、ありがとうございます」

身体を起こして両手で髪を撫でてから、波子さんが私を見た。

「ねえ、お姉さん」

「はい」

「私はどうして、ここにいるんですか」

「それは……」

言葉につまる。ホームに入居したということ、波子さんは認識していない。波子さんの言う「ここ」がこの部屋のことなのか、それともホームのことなのか、私の返事ひとつで展開が変わってしまう。

「私、熱なんか出してないし、どこも悪くないんです」

「そうですね。今はそうかもしれませんが、これは目に見えない問題なので、念のため人と離れて過ごす必要があるんです」

「私にその問題があるって、いったい誰が決めているの。そんなのただの差別じゃない」

「差別？」

「そうよ。こんな一方的に閉じ込められて、一歩も外へ出られないなんて」

「でもこれは、ご家族も望まれていることです」

「はあ？ 家族が？ 私の家族が？ そんなはずないわよ。どうしてそんなことが言えるの」

「それは……」

考えすぎてまた言葉につまる。部屋で安静にすることも、このホームで穏やかに暮らすことも、間違いなく家族の望みだった。医療者の指示だと伝えるよりはいいように思つたけれど、どうしてそんなことが言えるのかときかれれば、医療者から言われた方が良かったのかもしれない。

「もういいわ。こんなに元気でも、熱なんか出してなくても、病原菌扱いされることがあるのね。も



ういいわ。お茶ありがとう。早く出て行きなさい。うつされるの嫌でしょう」

再びベッドに倒れた波子さんは、私に背中を向けて布団の中にもぐってしまった。

「何か用事があれば、呼んでください……」

返事はない。「すみませんでした」と小さく言って、私は部屋を出た。波子さんの口から出た「差別」という言葉が、トゲのように心臓に刺さって取れなかった。

「あーあ」

事務所で記録業務を終え、頭のうしろで腕を組む。布団をすっぽりとかぶった時の波子さんの背中が、静止画面のように止まって動き出さない。繰り返し脳内再生されるあの背中が物語るのは、孤独だった。

「どうしたの？」

背中越しにおばちゃんケアマネがたずねてくる。「なんか……波子さんを見てると切なくて、早く馴染んでくれたらいいと思っていたのに熱を出しちゃったから……」

「そうね……」

「私、家族に見捨てられたと思わせちゃったかもしれないんです」

「そっか。入居したばかりだから、関わり方が難しいよね」

「はい。仏壇か、それに代わるものでもあれば、ま дайいんだけど」

「そうだね。ご主人とすごく仲が良かったみたいだからね」

「からね」

「そうだ。だから仏壇の手入れが大切なのは当たり前なんだ。亡くなったご主人と同じくらい、仏壇が大切なんだ。毎日仏壇に手を合わせ、仏壇に語りかけてきたんだから、それを奪われたら生きる支えをひとつ失うのと同じことなんだ。」

「どうしたらいいんだろう……」

私がうなだれると、後ろで電話の受話器を上げる音がした。ケアマネがどこかに電話をかけている。

「今、お話ししても大丈夫ですか。ちょっとお願いしたいことがあります……」

はい、はい、そうですか、と言いながらケアマネがメモ用紙の上でペンを走らせる。どうやら電話の相手は波子さんのご家族だ。

「さ、手伝って」

丁寧に電話をきいたケアマネが私に言った。手渡されたのは電話しながらとったメモと、A4用紙、それから数色入りのマジックだった。

ひとつひとつのメッセージを書きうつしながら胸が熱くなる。ケアマネが言った。

「電話に出たのよ、家族全員が。ああ、チロは出なかったけどね。これは本当に本人たちからの、生の言葉なの」

「そうなんです」

「うん。最後にね、お嫁さんが言ったの。お義父さんの言葉も伝えてほしいって。きつこう言うだろうからって」

「愛しているよ……」

「そう。生きてる時はこんなこと言わない人だったって。でも、天国にいる今なら、きつと伝えたいに違いないって。あのとき、生きてるうちに伝えておけば良かったと思ってるだろうって」

「そうですか……」

一文字一文字、丁寧に書きうつす。見放されてなんかいないですよ、波子さん。私が、そう感じさせてしまったのです。きちんと伝えなくちゃ。きちんと伝わるように書きます、波子さん。「愛しているよ」と。

